## 言語設定（京の言葉）

### アクセント

アクセントは常に penultimate に来る。アクセントの吹き飛ばしにより複合語であるか否かが明確なので、N2-N1 で「N1なN2」が作れる。同種のNを並べた場合は並列とも取れるが、生産的ではない。

### onset

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| p | t |  | k |
| b | d |  | g |
| f | s, ts |  | h |
|  | r | y |  |
| m | n |  |  |

ゼロオンセットは語頭のみ可能である。e は語頭であっても常に y- を伴う。yi は、たとえばdohi「あなた」に対応する南の下層の言葉 noi を京でも使うことがあるが、そのときの noyi などに現れる。

si → hi, tsi → ti

### 母音

a, e, i, o の4種。長短は対立しない。falling な二重母音は持たない。

### coda

-M, -N, -s がある。鼻音要素は -M と -N があり、直後に母音が来たときはそれぞれ m や n として現れる。そうでなければ合流し、直後の子音に合わせて変化する。基本的に直後の子音と同一の調音点を持つ鼻音になる。ここでは、慣習に従い、p, b, f, m の前では m で綴り、それ以外の子音の前では n で綴るものとする。 鼻音要素は語末では消失し（ただし単音節の機能語を除く）、r の前に来ると融合して -rr- となる（現代の京の言葉では rr の発音は r と同じである）。鼻音要素は s の前に来ると融合して -nts- となる。他には、摩擦音コーダ -s がある。これは h の前では融合して -hh- となり（現代の京の言葉では hh の発音は h と同じである）、また b, d, g および p の前には現れることがない。

### 語彙

[語彙](https://docs.google.com/spreadsheets/d/1w_jGRw5OvvMW3Y9x-5mR9KrKm1Kvy_Y3rczf20Ork1w/edit#gid=0)

### 統語論

語順はV-final。後置詞がメインだが、接頭辞もけっこうある。

格を表す後置詞は以下の通り。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ～から離れて | sesti | 名詞・場所詞の後に置いて場所詞を作る。 |
| ～に向かって | yã, yami | 名詞・場所詞の後に置いて場所詞を作る。yã はアクセントを持つので、直後の子音の影響も受けるけれども続け書きしない。 |
| ～の | tse | 直前に名詞を、直後に名詞・場所詞を取る。  数詞A + 名詞C + tse + 数詞B + 名詞C で「A個のCのうち、B個のC」の意味になる。 |
| ～を | ha | ただし、「これを」はhomi。 |
| ～と | hemi, hen- | hen- はアクセントを持たず、直後の子音の影響も受けるので、直後の語と続け書きする。 |
| ～も | ma | 1. 名詞の後ろに付けて、 「～についても、そうである」を表す。  2. 名詞を列挙した最後に置いて、名詞を並列に列挙していることを表す。「A, B, Cが」にも「A, B, Cを」にも用いるので、ma と ha を併用することはできない。2つのものを列挙するときには、「A, B ma」「A hemi B」「A hemi B ma」のどれも許される。  -ate yadi などの -ate は形式上は体言なので、ma を用いることができるが、 hemi は用いない。 |
| 列挙した全体 | mahiya | 名詞を列挙した最後に置いて、「AとBとCが」（たとえば、AとBだけではダメ）という意味を表す。 |
| ～が | ∅ | 主格は無標。コピュラ文は主格を2つ並べて作るが、コピュラ文に接続助詞を付けるときには存在動詞 hi「ある」で代用する。本来の存在動詞 hi は名詞1個または名詞1個と場所詞1個を取る。 |

「～の下で、～との影響下で」は ga との複合語で構成する。「神の下で」gapamo のように前置されるということに注意。

動詞の基本の形は常に -i で終わる。母音始まりの補助動詞（-egori「どうやら～のようだ」、-ate yadi「～しない」、-ate nosehi「～できない」）が結合するとこの -i は落ちる。その際、

* 本来的に -si であるものが -hi になっているだけの場合（hi「ある」、nosehi「できない」など）であれば本来の s に戻る
* 本来的に -hi である場合（parihi「話す」、rehi「使う」など）は h のまま
* 本来的に -tsi であるものが -ti になっているだけの場合（bati「来る」など）であれば本来の ts に戻る

場所詞は場所の表現を作り、動詞の動作にまつわる。

数詞は単立して名詞を前置修飾する。名詞化接辞にくっつくこともできる。なお santsate「無、ゼロ個」は名詞なので、名詞を修飾するときには tse が必要である。

## 言語設定（南の下層の言葉）

京の言葉との違いに絞って言及する。

・有声破裂と無声破裂の対立がほぼ消滅している。

・アクセントのある a が o に合流しがち

・アクセントのない e が i に合流しがち

・アクセントのない o は [u] と読まれる。それによって生じた [u] にアクセント移動でアクセントが載るケースもたまにある。

・語頭 e が ye に吸収されていない

・語中 -y-, -f-, -h- がしばしば脱落し、前後の母音が融合することで長母音が生まれる。

・語末に長母音があればそこが下降調。

・アクセントの後の -st- は -h- になる

・語頭の d- は n- に、g- は k- に吸収される。f- は h- になることもあるが多くは保たれる。

・-rr- は綴り通り長く読まれる。

## 言語設定（南の上層の言葉）

京の言葉との違いに絞って言及する。

・-s- の後の -t- は -h- で反映する。

### -mi 動詞

京ではこれは単立の動詞としては振る舞わず、直前の要素とくっついて単一語としての挙動を示す。一方、南では mi の直前の単語がアクセントを保つ。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **カタカナ** | **京の言葉** | **南上流** | **南下層** | **分析** | **語義** |
| メヒガミ | mehigami | mihiga mi | miiga mi | mehiga-mi | 注視する |
| メヒガスミ | mehigasmi | mihiga himi | miiga himi | mehiga-s-mi | 注視される |
| メヒガミヤ | mehigamiya | mihiga meya | miiga maa | mehiga-mi-ya | 注意した |
| メヒガスミヤ | mehigasmiya | mihiga himeya | miiga hamaa | mehiga-s-mi-ya | 注意された |

京においては、mi の直前が鼻音要素である場合がある。そのときは、京においても受動の -s- が -i- を伴い、-Nsi- > -Ntsi- > -nti- となる。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **カタカナ** | **京の言葉** | **南上流** | **南下層** | **分析** | **語義** |
| ファランミ | farammi | fara mi | (用いない) | faraN-mi | 掘る |
| ファランティミ | farantimi | fara himi | (用いない) | faraN-si-mi | 掘られる |